

学 位 論 文 の 要 旨

三 重 大 学

所 属	三重大学大学院医学系研究科 甲 生命医科学専攻 臨床医学系講座 産科婦人科学分野	氏 名	田 中 博 明
<p>主論文の題名</p> <p>The increase in the rate of maternal deaths related to cardiovascular disease in Japan from 1991-1992 to 2010-2012</p> <p>主論文の要旨</p> <p>医療の進歩により心血管疾患の予後は改善し、心血管疾患を有した女性が妊娠する機会は増加している。日本における心血管疾患を合併した女性の妊娠は、総妊娠数の 2-3%である。医療の進歩により心血管疾患を有する女性の妊娠が増加したが、心血管疾患を有する女性の妊娠管理の現状を把握したいと考えた。そのため、現在、日本における心血管疾患に関連した妊産婦死亡の現状について調査すること目的とした。また、過去の心血管疾患に関連した妊産婦死亡数と比較し、その推移を検討することを第二の目的とした。</p> <p>2010 年以降、日本の妊産婦死亡は日本産婦人科医会によって集計されている。それらの集計から 2010 年から 2013 年における心血管疾患に関連した死亡例を抽出した。</p> <p>母体背景として、疾患名、年齢、経産、発症時期。母体合併症、既往歴、産科的イベント、分娩方法について調査をおこなった。また、それぞれの疾患群に分けてそれぞれの背景について調査を行った</p> <p>過去の CVD 関連妊産婦死亡として、また、1991-1992 年に症例は厚生労働研究班（長屋班）によって調査された妊産婦死亡症例から抽出した。1991-1992 年における妊産婦死亡率と心疾患関連の妊産婦死亡率を算出し、1991 年から 1992 年時と比較を行った。妊産婦死亡率は、総妊産婦死亡率を総出生数+総死産数を割り人口 100,000 当たりの死亡数を意味する。</p> <p>心血管疾患を原因とした妊産婦死亡は、大動脈解離が 5 例（33%）、産褥心筋症が 3 例（20%）、Sudden arrhythmic death syndrome が 2 例（13%）、急性心筋炎が 2 例（13%）、心筋梗塞が 1 例（7%）、肺高血圧症が 2 例（14%）であった。年齢の中央値は、31 歳（19-39 歳）であった。初産婦が 10 例（67%）、経産婦が 5 例（33%）であった。発症時期は妊娠中が 9 例（60%）、分</p>			

娩直後が2例(13%)、産褥が4例(27%)であった。分娩方法は、帝王切開が4例(27%)、経膣分娩が5例(33%)、未分娩が6例(40%)であった。

1991-1992年と2010-2012年における総出産数+総死産数は1992-1992年：2,423,923、2010年-2012年：3,236,459であった。総妊産婦死亡数は、1991-1992年：197、2010年-2012年：150であった11。妊産婦死亡率は、1991-1992年：8.1、2010年-2012年：4.6であった。CVD関連妊産婦死亡率は、1991-1992年：0.28、2010年-2013年：0.46であった。1991-1992年と比べ、2010-2012年では有意に妊産婦死亡率、CVD関連妊産婦死亡率は増加していた($P<0.05$)。

今回の調査によって3つのことを明らかにした。一つは、心血管疾患に関連した妊産婦死亡の約半数は大動脈解離、産褥心筋症に関連していたことである。二つ目は、心血管疾患に関連した妊産婦死亡は、妊娠後半、産褥に多いことである。3つ目は、20年前と比べて心血管疾患に関連した妊産婦死亡は増加したことである。

心血管疾患に関連した妊産婦死亡を初めて明らかにしたことは重要な意味がある。日本における心血管疾患合併妊娠の全貌は明らかでない。心血管疾患合併妊娠は今後、増加することが予測される。また、外科的、内科的管理の進歩により、Fontan術後などこれまでにない循環動態を持つ妊婦が妊娠するであろう。我々は、大規模な調査を行い、心血管疾患合併妊娠の日本における全体像を明らかにしていく必要がある。